

日本語母語話者同士による 一対一のチャットの会話の開始部 —構成要素とその順序を中心に—

倉田 芳弥

要 旨

本研究は、日本語母語話者同士による一対一のチャットの会話の開始部の実態の一端を明らかにしたものである。開始部の表現形式とその順序、構成要素とその順序について分析した結果、『自己提示』はメッセージ以外の情報により行われることが観察された。また、ベルの『呼び出し』で相手に接続を求める電話と異なり、各自がまず接続するため、『呼び出し—応答』の過程はない。しかし、接続することがチャットという行為の開始とはならないため、チャットという行為を開始するために『呼びかけ—応答』という電話会話にはない過程を構成する。また、『挨拶のやりとり』『挨拶表現』という電話会話と同じ構成要素が確認され、用いられる表現形式、その順序も電話会話と似ていることが観察された。以上から、一対一のチャットの会話の開始部には、会話の普遍性が見られる一方、媒体の影響により独自のコミュニケーションが行われていることが示唆される。

【キーワード】インスタント・メッセージ、『自己提示—認定』、『呼びかけ—応答』、構成要素の順序、構成要素の機能

1. はじめに

近年のインターネット利用者の世界的な増加に伴い、コンピューター媒介コミュニケーション (Computer-Mediated Communication; CMC) も多様化している。チャットとは、コンピュータネットワークを通じてリアルタイムに文字ベースの会話を行なうシステム¹であり、そこでの会話は CMC の一つである。このような新しい媒体を使うことにより、コミュニケーション自体が変化する可能性があるが、普段は意識されずに行われている。そのため、新しい媒体でどのように会話が行われているのか、その独自性と他の場面との共通性を解明することは、単に一つの媒体の特徴を明らかにするだけでなく、コミュニケーション行動を考える上でも、新たな視点を提供するものとして重要である。

そこで本研究では日本語母語話者同士のチャットの会話の開始部に焦点を当て、チャットによるコミュニケーション行動を解明する第一歩としたい。

2. 本研究の対象とするチャット

チャットは、Web 上で行うチャット（以下 Web チャット）や、IRC² など専用のアプリケーションを用いて行うチャット、事前にチャットの相手のメールアドレスを登録して行うインスタント・メッ

セジャーなど様々である。

チャットと電話の場面特性についてみると（表 1 参照）、Web チャットと IRC は多人数で行い、匿名性が高いことが一般的であり共通の場面特性を有する。インスタント・メッセージは、文字による会話という点は電話とは異なるが、同期性が高く、参加形態が一対一であること、匿名性が低いという点では電話と共通する特性を持っている。そこで本研究ではインスタント・メッセージを対象とし、似た場面特性を持つ電話会話の知見との比較からチャットの独自性や他媒体との共通性を解明したい。

表 1 チャットと電話の場面特性 (岡本 1998 を参考に作成)

	チャット			電話
	Web チャット	IRC	インスタント・ メッセージ	
1 同期性	同期性が高い	同期性が高い	同期性が高い	同期
2 モード	文字	文字	文字	音声
3 形態 (一般的なもの)	多人数	多人数	一対一	一対一
4 匿名性	高い	高い	低い	低い

3. 先行研究

3.1 チャットの会話の開始部の研究

Negretti (1999) は英語学習者と英語母語話者の参加する Web チャットを分析し、電話会話でみら

れる「自己提示－認定」が現れ、この「自己提示」とは、相手に存在を認識してもらうことを目的とした自己紹介であることが多いと述べている。

Rintel et al. (2001)によると、IRCの開始部は、1) サーバーによる新規参加者のアナウンス、2) 新規参加者の最初の行動、3) 既存の参加者の返答という順番で進行する。1) は、自動的で電話のベルと似ているが、「呼び出し」の機能はないため、1) に対する既存参加者の反応は義務ではなく、また1) により新規参加者の名前がわかるとしている。

3.2 電話会話の開始部の研究

Schegloff (1986) は約 450 の英語の電話会話をともに開始部の構成要素として、1「呼び出し－応答」、2「自己提示－認定」、3「挨拶のやりとり」、4「健康に関するやりとり」の4つをあげている。日本語の電話会話 58 件を分析した吉野 (1994ab) は、4「健康状態に関するやりとり」の部分に相当する位置については、日本語では表2のa～eのような多様な表現が用いられるとして、それらを「挨拶表現」と呼び (表2参照)、3「挨拶のやりとり」の後に現れるとしている。

表2 電話会話の開始部に見られる広義の「挨拶表現」(吉野 1994ab をもとに作成)

挨拶表現	例
a 前回の接触への言及	昨日は失礼しました
b 非接触時間への言及	ひさしぶりー
c 健康状態に関する質問	お元気ですか
d 近況に関する質問	どうしてんの
e 接触時の状況に関する質問	今いい？

Hopper (1992) は、開始部の順序について、Schegloff (1986) の示した構成要素は上記 1 から 4 の順番で現れ、先に進むほど典型的な例からの逸脱が多くなるとしている。吉野 (1994a) は、①「挨拶表現」の a と b は共起しない、② a (または b) から c や d の質問に移ることが多い、③ e が a～d に先立つことはない (表2参照) など、「挨拶表現」の順序について指摘している。

電話会話の開始部では、認定されなければ会話自体が始まらないという点から「自己提示－認定」は重要な課題とされ (岡本・吉野 1997)、「自己提示－認定」を扱った研究は多い (Schegloff 1979, Hopper 1992, 今石 1992, 吉野 1994ab, 岡本・吉野 1997 など)。さらに吉野 (1994a) は、「自己提示－認定」に加えて、相手との関係を再構築することを開始部のもう一つの課題として挙げている。

以上、チャットの会話及び電話会話の開始部の研究について概観した。チャットは研究自体が限られており、開始部に現れる構成要素やその順序など開始部全体の構造や機能は明らかにされていない。また、匿名性の高い多人数によるチャットを対象としたものが多く、インスタント・メッセージャーについては明らかではない。一方、電話会話の開始部の研究は、既に日本語を対象とした研究もあり、構成要素や順序に関する一定の知見が得られている。また2章で示した通り、インスタント・メッセージャーの場面特性は、電話との類似点も多い。そこで、本研究では電話会話の枠組みを援用し分析を行う。

4. 研究内容

4.1 研究課題

本研究の目的は、日本語母語話者同士による一対一のチャットの会話の開始部の実態の一端を明らかにするものである。そのため局所的な表現形式と会話全体からみた機能として開始部に現れる構成要素の2つの側面から、開始部の内容及び順序を明らかにする。研究課題は以下の通りである。

課題 1：開始部で使われる表現形式とその順序はどのようなものか。

課題 2：開始部の構成要素とその順序はどのようなものか。

4.2 調査方法

本研究では、2002 年 7～10 月にかけて収集した同性友人同士の一対一のチャット会話資料³63 件を分析対象とする。調査協力者には、異なる相手とのチャット3件を上限として、チャットの会話を保存したファイルを提出してもらった。調査対象者 95 名 (調査協力者 32 名、チャットの相手 63 名)のうち、90 名が 10 代後半から 20 代で、85 名がチャットの経験者であった。チャットソフトはインスタント・メッセージャーの一つである MSN Messenger (調査時点の最新バージョンは V4.6) を用いた。また、チャット終了後に調査協力者に対して質問紙調査を行った。質問紙調査は調査対象者の属性、チャットの経験、親疎関係などの共通の質問と、会話の内容に関する個別の質問から構成される。

4.3 分析方法

まず、チャットの会話について、「最初的话题に入る前の言葉によるやりとり」を開始部と定義し、開始部の有無を調べた。本研究データ 63 件のうち、

開始部のないものは 4 件であり、開始部のある 59 件を分析対象として分析を行った。

課題 1 については、まず開始部に現れる表現形式を文字通りの意味から類型化した。挨拶表現については、吉野（1994ab）の枠組みを参考にした。更に表現形式ごとにチャットの会話に現れる件数を数えて出現頻度を示した。表現形式は「挨拶ー挨拶」のように隣接ペア⁴を成すことが多いが、第 2 部分が省略され次の隣接ペアを構成する場合もあるため、第 2 部分が省略されている場合も 1 件として数えた。次に順序については、表現形式の組み合わせに該当する件数を示し、表現形式の順序を提示した。

課題 2 については、開始部を構成する各要素が参加者によって達成される過程を記述的に示した。

5. 結果

5.1 課題 1: 開始部で用いられる表現形式とその順序

5.1.1 開始部で用いられる表現形式

開始部に現れた表現形式及び具体例を表 3 に示す。「挨拶」が半数以上の会話に現れ、「呼びかけー応答」の表現も全体の約 1/3 の会話に現れている。「名乗りー応答」⁵は、59 件中 1 件であり、開始部で名乗ることはほとんどない。また、相手の返答後に相手の存在を認定する「存在の認定」が観察された。挨拶表現のうち「当日の行動に関する質問・言及」、「季節に関する質問・言及」は、電話会話の開始部では指摘されていないものであるが、これはチャットに特有なものではなく、状況により電話会話にも現れるものだと考えられる。その他、チャットの感想、使い方に関する質問、冗談などがみられた。

5.1.2 開始部で用いられる表現形式の順序

ここでは、隣接ペアの第 1 部分に着目し、表現

形式の組み合わせとそれに該当する件数を提示する。

「存在の認定」は隣接ペアの第 2 部分となるため、また「名乗りー応答」、「季節に関する質問・言及」は件数が少ないため、除いて整理した。例えば、会話例 1 の順序は、1「挨拶」→2「挨拶表現」（「非接触時間」→「接触時の状況」→「近況」）となる。

【会話例 1：開始部に現れる表現形式の例】		【開始部】
1A: どもども		挨拶
2B: おひさしぶりです。		<非接触時間>
3A: 今は自宅？		<接触時の状況>
4B: イヤー、ほんととおひさしですいません		<非接触時間>
5B: そう、自宅です。		<接触時の状況>
6A: 帰省は？		<近況>
7B: お金と時間がないのでだめです。		<近況>
8A: なるほど		<近況> 挨拶表現
ところで、		【主要部】
注) 網掛けは隣接ペアの第 1 部分である。		
8A の改行は筆者によるものである（会話例 2 の 8A も同様）		
A: チャット行為開始者、第一メッセージ送信者		
B: 第二メッセージ送信者		
番号: メッセージ送信番号（凡例については以下の会話例も同様）		

まず、「呼びかけ」「挨拶」「挨拶表現」の順序を表 4 に示す。

表 4 「呼びかけ」・「挨拶」・「挨拶表現」の順序

表現形式の順序		表現形式の組み合わせ							
1 呼びかけ	順序 ↓	○	○	○	○				
2 挨拶		○	○	○	○	○	○	○	
3 挨拶表現		○	○	○	○	○	○	○	○
計 59 件		7	5	2	7	10	18	10	

「呼びかけ」が「挨拶」「挨拶表現」より後に来的ことはなく、また「挨拶」が「挨拶表現」の後で現れることはない。ここから開始部には 1「呼びかけ」2「挨拶」3「挨拶表現」という順序がみられる。

次に「挨拶表現」の順序について同様に整理したものを表 5 に示す。「挨拶表現」を含む開始部 37

表 3 一対一のチャットの会話の開始部の表現形式及び具体例
(各表現形式を含むチャットの件数/分析対象となるチャット 59 件)

呼びかけー応答	(おおーい/ようーはい/やっほーひゃっほーい)	23 件
名乗りー応答	(○○でーすーこんばんわー, ○○ちゃん)	1 件
存在の認定	(おお, いたいた)	4 件
挨拶	(ちわっすーこんにちは/こんばんはーーこんばんはーー)	35 件
挨拶表現	前回の接触への言及 (この前はいきなり切っちゃってすいません^^;)	4 件
	非接触時間への言及 (久しぶりー!!)	12 件
	健康に関する質問・言及 (お元気ですか?/元気にしてる?)	10 件
	近況に関する質問・言及 (どうすか, 最近/最近忙しい?)	14 件
	接触時の状況に関する質問・言及 (今, いい?/今は自宅?)	12 件
	当日の行動に関する質問・言及 (今日は何してたの?)	6 件
	季節に関する質問・言及 (NZ は今冬真っ盛りなんですねー)	1 件
その他	チャットの感想や使い方に関する質問, 冗談など	7 件

注) 下線は筆者による。

件のうち 34 件について、1「前回の接触への言及」「非接触時間への言及」、2「健康に関する質問・言及」3「近況に関する質問・言及」「接続時の状況に関する質問・言及」「当日の行動に関する質問・言及」という順序が見られた。吉野（1994a）の示した電話会話の「挨拶表現」の順序と似ていることがわかる。

表 5 「挨拶表現」の順序

表現形式の順序		表現形式の組み合わせ							
1 前回の接触への言及／ 非接触時間への言及	順序 ↓	○	○	○	○				
2 健康に関する質問・言及		○	○	○	○	○	○		
3 近況に関する質問・言及 ／当日の行動に関する質問・言及 ／接続時の状況に関する質問・言及			○	○			○	○	
計 34 件		5	2	1	5	2	3	16	

5.2 課題 2：開始部の構成要素とその順序

先程の会話例 1 を構成要素という観点から整理したものが会話例 2 である。以下この会話を例にとり、開始部の構成要素の各過程について示す。

【会話例 2：開始部に現れる構成要素の例】	
オンラインの欄に B の名前表示	【開始部】
・・・B の『自己提示』	
1A: どもども ・・・B を『認定』	
メッセージ外情報による A の『自己提示』	
『呼びかけ』 (1A 送信により実現)	
『挨拶のやりとり』	
2B: おひさしぶりです。	
・・・A を『認定』	
『呼びかけ』に対する『応答』 (2B 送信により実現)	
『挨拶表現』	
3A: 今は自宅？	・・・『挨拶表現』
4B: イヤー、ほんとにおひさしですいません。	・・・『挨拶表現』
5B: そう、自宅です。	・・・『挨拶表現』
6A: 帰省は？	・・・『挨拶表現』
7B: お金と時間がないのでだめです。	・・・『挨拶表現』
8A: なるほど	・・・『挨拶表現』
ところで、	【主要部】

5.2.1 『自己提示ー認定』⁶の過程

MSN Messenger でチャットをするためにはまず相手の E メールアドレスを登録しなければならない。登録した相手の状態については、オンライン（接続している）かどうかメインウィンドウに表示される（図 1 参照）。このメインウィンドウは自分自身がオンラインにすると開く画面であり、この時点ではチャットという行為は開始していない⁷。チャットを開始するためには、会話ウィンドウ（図 2 参照）を開く必要がある。

A がチャットという行為を開始する場合、メインウィンドウ（図 1 参照）のオンラインに表示されている登録者の中から B を選ぶと A のパソコン画面に会話ウィンドウ（図 2 参照）が開く。しかし、A からのメッセージが送信されて初めて、B のパソコン画面に会話ウィンドウが開くため、この時点では B の会話ウィンドウは開いていない。そのため行為開始者と最初のメッセージ送信者は必ず一致し、会話例 2 では A が行為開始者であり、第一メッセージ送信者である。

A は B の名前がオンラインの欄に表示されているのをみて、「どもども」と最初のメッセージを送信している。この B の名前の表示は B の『自己提示』として機能し、A の最初のメッセージは、局所的な文字通りの意味としては「挨拶」であるが、開始部の構成要素としては、B の『認定』として機能している。既知の相手に対して用いる挨拶が行われることから、挨拶という表現形式により B の『認定』を B に伝えているのである。さらに、A が最初のメッセージを送信すると、B の画面に会話ウィンドウが開き（図 3 参照）、A の名前がメッセージ外情報として表示され、これが A の『自己提示』として機能する（図 3①～③）。まず図 3 の①はこの会話ウィンドウが A との会話用であることを表

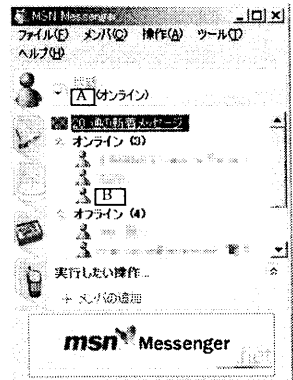


図 1 メインウィンドウ（A 側）

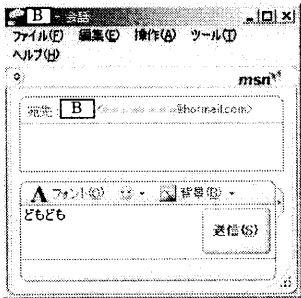


図 2 会話ウィンドウ
（メッセージ送信前の A 側）

し、②では B のメッセージの送信先が A であることを A の名前とメールアドレスで表示し、さらに③でメッセージ送信者名として A の名前が表示されている。そして A の『自己提示』を受け、B は B の最初のメッセージ (2B「おひさしぶりです。」) で、A の『認定』を挨拶表現を用いて A に伝達しているのである。

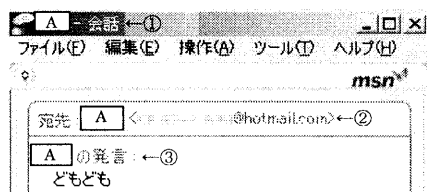


図3 会話ウィンドウ (B 側)

次の会話例 3 は相手の返答が遅れ、『自己提示—認定』の過程が通常のパターンから逸脱しているものである。まず A は、1A で B を『認定』したことを伝達するが、相手の反応がないため、『認定』が未完了となった。そこで、2A で再度 A の『自己提示』を行ったところ 3B の応答があり A を『認定』している。そしてこの 3B のメッセージ送信により再度 B の『自己提示』が行われ、A は 4A で、3B の存在を『認定』する表現を用いて、B を再度『認定』したことを相手に伝達しているのである。

【会話例3：相手の返答が遅れた場合の自己提示—認定の例】
 オンラインの欄にBの名前の表示・・Bの『自己提示』
 1A: やっほー・・Bを『認定』(未完了),
 メッセージ外の情報によりAの『自己提示』
 2A: あら?・・メッセージ外の情報により再度Aの『自己提示』
 3B: はいはい・・Aを『認定』,
 メッセージ外の情報により再度Bの『自己提示』
 4A: おお、いたいた・・Bを『認定』
 (以下略)

このように通常から逸脱した例を見ることにより、通常『自己提示』はオンラインの欄に表示される名前 (図 1 参照)、メッセージ外の情報 (図 3①～③参照) により行われ、『認定』はチャット開始者とその相手のそれぞれ最初のメッセージにより行われること、メッセージの送信前から既に『自己提示—認定』の過程が始まっていることが可視化される。

5.2.2 『呼びかけ—応答』の過程

一対一のチャットの開始部には、『呼び出し—応答』の過程はなく、代わりに『呼びかけ—応答』という過程がある。

一対一のチャットの場合、電話のようにベルの音で『呼び出し』て、相手に接続を求めることはなく、

各自が好きな時に接続するため、電話のような『呼び出し—応答』の過程はない。また接続してメインウィンドウを開いただけではチャットという行為の開始とはならないため、チャットを開始するためには、『呼びかけ』で相手に気付いてもらうことが必要である。チャット行為の開始者が最初のメッセージを送信することにより、相手側の会話ウィンドウが開き、相手は呼びかけられていることに気付く。つまり最初のメッセージを送信する行為が『呼びかけ』となり、相手側がそれに対してメッセージを送信する行為が『応答』となる。課題 1 の表 3 の「呼びかけ—応答」は、表現としてのものであり異なる次元のものである。構成要素としての『呼びかけ』はメッセージを送信するという行為であり、そこで伝達されるメッセージは表 3 の「呼びかけ」だけではなく「挨拶」や「挨拶表現」など様々である。会話例 2 では、1A の「どもども」というメッセージの送信と 2B の「おひさしぶりです。」というメッセージの送信が『呼びかけ—応答』の過程となる。

5.2.3 『挨拶のやりとり』及び『挨拶表現』の過程

『挨拶のやりとり』と『挨拶表現』の過程は、表 3 の「挨拶」と「挨拶表現」によりそれぞれ実現する。このため、『挨拶のやりとり』の方が『挨拶表現』より先に現れる。開始部では、「挨拶」や「挨拶表現」からチャットが開始することも多く (表 4 参照)、この場合、『自己提示—認定』の過程、『呼びかけ—応答』の過程と重なって実現する。

以上から一対一のチャットの開始部の構成要素の順序を表 6 にまとめる。

この順序は大まかなものであり、『自己提示—認定』の過程は最初に始まるが『呼びかけ—応答』の過程と部分的には重なる。また最初のメッセージとして「挨拶」や「挨拶表現」を送信する場合には、『挨拶のやりとり』及び『挨拶表現』の過程が『自己提示—認定』、『呼びかけ—応答』と重なるなど、開始部では様々な要素が重なりつつ遂行される。

表 6 一対一のチャットの会話の開始部の構成要素の順序

一対一のチャットの会話の開始部の構成要素の順序	電話会話の開始部の順序 (Hopper1992, 吉野 1994a をもとに作成)
1. 自己提示—認定	1. 呼び出し—応答
2. 呼びかけ—応答	2. 自己提示—認定
3. 挨拶のやりとり	3. 挨拶のやりとり
4. 挨拶表現	4. 挨拶表現

6. 考察

ここでは、構成要素の機能について媒体の独自性と会話の普遍性という点から考えたい。

まず『自己提示－認定』の機能とは、相手が誰なのかを互いに認め合いそれを相手に伝える「互いの認定」というものである。一対一のチャットでは、メッセージ外の情報により『自己提示』が行われ、チャット開始者とその相手のそれぞれ最初のメッセージにより『認定』が行われる。IRC の場合、サーバーが新規参加者の名前をアナウンスする (Rintel et al. 2001) ことが、新規参加者の『自己提示』だと考えられる。これはメッセージ外の情報により行うという点で一対一のチャットと似ており、文字情報が利用できるためと考えられる。既知の間柄による対面会話の場合、「互いの認定」を言語化せず非言語行動で行う場合もある⁸。電話会話では、会話を進行しながら音声情報により行う。このように「互いの認定」という機能を有する『自己提示－認定』は普遍的だが、その実現の仕方は媒体により異なる。

『呼びかけ－応答』は、会話を開始するために相手に「呼びかける」ものとして機能しており、これは、各自が好きなきに接続し、接続が会話の開始とはならないことから必要となる。この構成要素は電話会話には見られないもので、システムの違いが会話の組織に影響を及ぼしていることがわかる。

『挨拶のやりとり』『挨拶表現』という構成要素が見られたことから、一対一のチャットには、電話会話と同様「相手との関係の再構築」(吉野 1994a) という機能があると考えられる。対面の出会いの挨拶についても、「両者の関係が別れる前と同じで変わっていないことを確認したい」(鈴木 1981:44) との指摘があり、既知の者同士のコミュニケーションでは、この機能は共通していると考えられる。また、表現形式やその順序を見ても電話会話と同様であり、実現の仕方にも共通性がみられる。

「互いの認定」と「相手との関係の再構築」といった機能は、既知の間柄においては、媒体を超えて普遍的なものであり、開始部での人間関係の築き方は、チャットという新しい媒体においても、本質的な部分はこれまでと同様に行われているといえよう。しかし、『自己提示－認定』のように、場面特性が影響して実現の仕方が異なっていたり、『呼びかけ－応答』のように電話会話に見られないものが

あるなど、媒体の特性が会話の組織にも影響し、一対一のチャットの会話の独自性も見られたといえる。

7. 今後の課題

本研究はチャットという新しいメディアによる会話がどのように行われるかを解明する第一歩であり、調査範囲は限られているが、新しいメディアでのコミュニケーションの独自性と既知の間柄に見られるコミュニケーションの普遍性が観察された。今後は、開始部に留まらず、その他の部分の分析も積み重ね、チャットにおけるコミュニケーションの全体像を明らかにする必要がある。例えば、チャットの会話の特徴として、異なる話題が混在し (Werry1996)、隣接ペアが必ずしも隣接しない (岡本 1998) ということが言われており、これは本データでも会話例 1 を始めとして数多く見られた。これには一対一のチャットの「同期性は高いが完全な同期ではない」という特性が影響しており、対面会話、電話会話では見られないものである。このような場合、対面会話、電話会話とは異なる談話管理が行われていると考えられるが、それはどのようなものなのかということ、またこの局所的な特徴が話題の展開に与える影響などについては今後の課題としたい。

このような研究を進めることは、普段見えていたが気づかない会話の仕組みを浮き彫りにする。母語話者自身が気づかない仕組みを明らかにすることで、学習者がチャットを用いる時の手がかりとなると考えられる。しかしそれだけではなく、このような媒体による制約を受けたコミュニケーションの研究を進めることから、対面の会話を可視化することができ、そこからコミュニケーション全般への知見、さらには日本語教育への示唆を得ることができるだろう。今後、接触場面についても同様の研究を進め、母語話者同士の場合との比較を通して意識せずに行っている母語話者と学習者の調整などを明らかにし、日本語教育へと役立てていきたい。

付記：本稿は 2002 年度お茶の水女子大学修士論文 (伊藤 2003) の一部に加筆・修正したものである。

注

1. IT 用語辞典 e-Words(<http://e-words.jp/>)より引用。同期性の高い媒体であることから、本稿ではチャットを介したやりとりをチャットの会話と呼ぶ。
2. Internet Relay Chat の略。IRC は 1988 年にフィンランド

- で開発され、1990 年から日本でも利用が開始された。利用者はチャンネルと呼ばれるグループ単位のネット上のコミュニケーションの場を作り、そこに参加して会話を行う。(岡本 1998)
3. できるだけ自然な会話を収集するため、時間、内容は指定せず、データの具体的な使用目的はチャット終了後に調査協力者に説明した。また、チャットの相手には事前に調査対象であることを知らせず、チャット終了後に説明し了承を得るようにした。
 4. 隣接ペアとは、質問と回答のように対をなす二つの発話の連鎖で第 1 部分 (first part) が決まった第 2 部分 (second part) を要求するものである。
 5. Negretti (1999) と異なり「名乗り」が少ないのは、Negretti (1999) の研究対象が匿名性の高い多人数のチャットであるためと考えられるが更なる調査が必要である。
 6. 表 3 の表現形式と区別するため、会話の全体的な組織からみた開始部の構成要素については『 』で表す。
 7. メインウィンドウを開いても、チャットをせずにまたオフラインにすることはよくある。
 8. 例えば、向こうから来る友人に、声が届かないうちから互いに笑顔で手を振るような場合が考えられる。

参考文献

- 伊藤芳弥 (2003) 『チャットの会話における開始部と終結部－友人同士による一対一のチャットを対象として－』お茶の水女子大学修士論文 (未公開)。
- 今石幸子 (1992) 「電話の会話のストラテジー」『日本語学』11-10, 65-72.
- 岡本能里子 (1998) 「しゃべる－チャットのコミュニケーション空間」『現代のエスプリ』No.370, 127-137.
- 岡本能里子・吉野文 (1997) 「電話会話における談話管理－日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析－」『世界の日本語教育』7, 45-60.
- 鈴木孝夫 (1981) 「『あいさつ』とは何か」『あいさつと言葉』(「ことば」シリーズ 14), 文化庁, 51-64.
- 吉野文 (1994a) 『電話の会話の開始部に関する研究』お茶の水女子大学修士論文 (未公開)。
- 吉野文 (1994b) 「電話の会話におけるかけ手と受け手の言語行動－開始部を中心として－」『言語文化と日本語教育』7, 1-13.
- Hopper, R. (1992). *Telephone conversation*. Bloomington: Indiana University Press.
- Negretti, R. (1999). Web-based activities and SLA: A conversation analysis research approach. *Language Learning & Technology*, Vol. 3, No. 1, 75-87.
- Rintel, E.S., Mulholland, J., & Pittam, J. (2001). First things first: Internet Relay Chat openings. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 6 (3).
- Schegloff, E. A. (1979). Identification and recognition in telephone conversation openings. In G. Psathas(Ed.), *Everyday language: Studies of ethnomethodology* (pp. 23-78), New York : Irvington.
- Schegloff, E. A. (1986). The routine as achievement. *Human Studies*, 9, 111-151.
- Werry, C.C. (1996). Linguistic and interactional features of Internet Relay Chat. In: S. Herring, (Ed.) *Computer-Mediated Communication: Linguistic, Social, and Cross-Cultural Perspectives* (pp.47-63), Amsterdam: John Benjamins.

くらた かや／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座
itky15@yahoo.co.jp

Elements and its Order of Opening Section in the Instant Messenger Conversations by Japanese Native Speakers

KURATA Kaya

Abstract

This study analyzed elements and its order of opening section in the Instant Messenger conversations by Japanese native speakers. As a result, the following points were found. First, "identification" is performed by the information other than messages. Second, "summons-answer" sequences do not appear, because each person connects to Instant Messenger by himself unlike telephone conversation which requires receiver to connect phone by ringing bell. However, "call-answer" sequences appear in the Instant Messenger conversations to start conversation, since connecting to Instant Messenger is not equal to beginning conversation. Third, "greetings", and "greeting expressions" appear and its expressions and its order are like telephone conversations. In conclusion, opening section of the Instant Messenger conversations shows original communication style affected by medium in addition to features common to conversations.

【Keywords】 Instant Messenger, "identification-recognition" sequences, "call-answer" sequences, order of elements, function of elements

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)